

何年か前に「KY」という言葉が流行った時期がありました。ご存知の通りKYは「空気を読めない」ことを指す言葉であり、いわゆる場の雰囲気が把握できない人に対して使う言葉でした。日本語の頭文字を英語のアルファベットでとって「ケーワイ」と略語にした言葉の背景も面白かったですが、その一方でそもそも常にある「空気」を、あえて「読む」という表現を聞いて、とても日本人らしい表現だと思いました。「その場の雰囲気から状況を推察する。特に、その場で自分が何をすべきか、すべきでないかや、相手のして欲しいこと、して欲しくないことを憶測して判断する。」という説明でも分かるように、常に自分に与えられた社会的立場を察しないといけないということです。空気とは、説明しなくても暗黙的に皆が分かるものという考えが根底にあるといえます。それはその国や都市の文化が分からなかったら「読む」ことが難しいものです。

一見曖昧にもみえる「空気」に、「感」とつけた「空気感」という言葉が、私が日本に留学を決めたきっかけになり、現在も制作している映像作品の根底にある概念でもあります。皆さんは「空気感」という言葉を聞くと、何が思い浮かびますか？

空気感といいますと、色々思い浮かぶと思いますが、私が考える空気感は、時と場を含む言葉だということです。磯崎新先生が「間」という概念について話す時、間は空間と時間を両方指す言葉であることが印象的でしたが、空気感という言葉には、時間も、空間にさらにモノの存在も感じられます。その存在が動いたり行動を起こしたりすることから、時間と場所性が生まれ、存在の記憶の中に何が残るのでしょう。ですので、空気は実際には無色無臭ですが、空気のイメージはぼやっとしているような、なんだか純白で、風や霧のような、心地よいものだと考えています。目に見えない、しかも感じられている感覚すらありませんが、いつも心地よくできるもので、疑いもなく存在を信じてしまうものとも言えます。また、誰が、いつ、つくったか分からなくても、いつの間にか形成される、場の雰囲気としての空気もとても自然な現象だということには、大変興味深いです。

私の専攻分野である映像の世界でも、空気感は非常に大事な要素になっています。映像作品をつくるにあたっては、あえていいますと「空気感をつくる」のが仕事です。空気をつくるというと、不思議に思う人も多いと思います。空気は考えてみるとつくるものでなく、元々あるものです。科学的に空気を研究する人もいるでしょうが、私は作品の中で感じられる空気をどのように作り上げるかを考えています。KYでいう「空気」も人々に必要不可欠である空気とは違う、おそらく雰囲気をさすでしょう。日本の誇りともいわれているアニメからは、私はある「真空生」を感じます。現実と非現実の境目を行き来するより、アニメでしか表現できない世界を描いていることが、つまり独特の時間を表現しているのが特徴で、日本アニメの魅力だと考えています。

私が日本に留学しようと思ったのは、日本映画とテレビから感じられる空気感が非常に異なっていたことからでした。出身地である韓国と距離的には近いのに、表現には大きな差があることもその理由でしたが、日本映画独特の空気感は、ジャンルを通して感じられる重みがありました。現実と夢の境目を保っているような雰囲気が印象的でしたが、それ

に比べるとテレビでは劇的な表現が多いと感じました。同じ「映像」という枠組みの中でもここまで違うということに興味をもち、日本の文化と映像との関係や、映像作品の特徴を探ろうと思い、東京に来るようになりました。

実際日本語を習ったり、日本文化に触れながら感じたことは、思った以上「空気感」につながるが多いことです。日本語にある空気を表す表現をみても、空気を読むということもそうですし、ほっとすることや、息を発するようなオノマトペなど、多いことが分かりました。またそのようなことは表現にもつながり、デザインやアートの領域では独自の息吹をもって表現しているようにみえます。

空気感の面白さは、やはり動きや時・空間によって、一回しかない現実、二度とこない瞬間を大事にすることだと思います。考えてみると、その場の空気は似ているものはあるものの、そこでしか感じられない独特の雰囲気があります。空気の中に生きていながらも、あらためて空気を感じるきっかけをつくるのが、アート作品の役割だと思います。美しさや感動を通して、何かのメッセージを与えること、そのことから空気を改めて感じるような思考の機会を設けることは、変化のスピードが早い今であるからこそ必要なことだと思います。

ケーワイは、「空気を読めない」ことも「空気を読まない」ことにもなります。周りの雰囲気も読みつつ、あえて空気を読まずに自分で空気をつくりあげていくことも、含むことができるでしょう。渥美奨学金で支えられながら研究した論文と制作した作品の中にも、空気感は感じられると思います。また、なんだかなつかしく、やさしく感じられるような自然な空気をつくる作品制作も、「つくる機会」をつくるワークショップの活動を続けていることも、奨学生として1年間研究した結果にもつながります。まさに、「空気、間」から生まれる「空気感」を目指せたこと、渥美財団に感謝を申し上げたいと思います。

空気から日常まで話がのびてきましたが、空気を読んで話を閉じます。これから私は、KYでいこうと思っています。ほっとする息のような感覚、周りの状況をふっと変えるような刺激、空気を読んだと周りから認められた時の通じ合った気持ち、お互いのことを配慮する暖かい心遣いを忘れずに、これからも空気を読みながら生きていきたいと思っています。少々大げさなことになってしまいましたが、私の不足な文章が、皆さんがにこりとしながら「KY」について改めて考えた一時になったら嬉しいです。